

特 集

第 22 回公開講座抄録

Culture and the Unconscious

—How can psychoanalysis help us in the world in which we live today?—

文化と無意識

— 精神分析は現代を生きる私たちにとってどのように役立つのだろうか—

(2024.11.3 於：キャンパスプラザ京都)

- 講 師： Kannan Navaratnem (京都大学大学院教育学研究科客員教授／
University College London 名誉准教授)
- 通 訳： 山本 文 (日本メンタライゼーション研究会)
- 挨 拶： 松下 姫歌 (京都大学大学院教育学研究科教授 臨床教育実践研究センター長)
- 司 会： 野口 寿一 (京都大学大学院教育学研究科准教授)

<ご挨拶>

松下 姫歌 (京都大学大学院教育学研究科教授 臨床教育実践研究センター長)

センター長の松下と申します。本日は、多くの皆様にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。連日の大雨で交通機関にも大きな乱れが起きましたけれども、皆様におかれましては、ご無事だったでしょうか。大変心配しておりましたが、本日天候が回復しまして、大雨は時間をおいての影響もありますので、どうかくれぐれもお大事に過ごされますよう、お願いいたします。

さて、本日は今年度当センターの客員教授としてお迎えしまして、Kannan Navaratnem 先生に「文化と無意識」というタイトルでご講演をいただきます。Kannan 先生は大変多様な文化に開かれた先生でもあられて、そんな先生に、文化の日にお話しただけのこと、当センターとしても大変嬉しく楽しみにしておりました。精神分析の視座から、現代を生きる我々に示唆に富むお話をいただけることと思います。通訳は、山本文先生にお願いしております。本日が、文化的な 1 日になり、これからの我々のさらなる歩みに繋がっていくことを願ひまして、挨拶に代えさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

野口：松下先生、ありがとうございました。では早速、本日の講師であられる Kannan Navaratnem 先生をご紹介します。Navaratnem 先生は、中間学派の精神分析家であり、イギリス精神分析協会の訓練分析家、University College London の名誉准教授としてご活躍されています。タヴィストックセンターにて訓練を受けたのち、同センターにて客員講師を務められ、専門家の指導と訓

練に従事しておられます。また、イギリスの公的医療機関や居住型心理療法施設、慈善団体等、臨床現場においても長年、指導的立場を担ってこられました。近年では、アジア圏でも多くの講演をなさっており、専門家への教育活動にも精力的に携わっておられます。

なお、本日のご講演では、日本メンタライゼーション研究会の山本文先生に逐次通訳をしていただきます。山本文先生は、ニューヨーク市立大学ジョン・ジェイ校大学院（司法心理学）をご卒業後、株式会社トゥエンティフォーセブンや株式会社 Brave JAPAN にて、ビジネス英会話講師や在日外国人生活支援に従事してこられました。また、日本メンタライゼーション研究会に所属され、数々の講演にて通訳としてご活躍されています。

お二人とも本日はどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、Navaratnem 先生、よろしくお願いいたします。

<第1部 ご講演>

文化と無意識 ― 精神分析は現代を生きる私たちにとってどのように役立つのだろうか ―

Kannan Navaratnem（通訳：山本 文）

みなさんこんにちは、お越しいただきありがとうございます。

このお話を始めるにあたって、少し短い逸話を紹介したいと思います。数日前、私は大学からタクシーでアパートに戻っていました。運転手の方が好奇心旺盛で、おしゃべり好きで気さくな男性で、大学で何を教えているのかと聞いてきました。具体的なことはあまり話したくなかったので、私は心理学科で働いているとだけ答えました。彼は、「はあ！」と言って続けました。「でも、みんな心理学者だと思うんだよね」と。私は興味津々で、どういう意味かと彼に尋ねました。彼の答えはとてもストレートなものでした。「私たちは皆、自分の人生をうまくやっていくために心理学と必要としていると思うんだ。つまり、妻と一緒に生活し、子どもを理解するためには心理学者が必要なんだ。友人や上司でさえ、心理学的な理解が必要なんだ」。私は学生の立場に身を置き、乗車時間を超えるような長い会話になることを少し恐れながらも、思い切って彼にその理由を尋ねました。彼の答えはまた爽やかなものでした。「人とうまくやっていくためには、常に人の心の中で何が起きているのかを知る必要がある」と。私はすぐに、これが日本では珍しい出来事であることに気づきました。なぜなら、ほとんどのタクシードライバーは、走行中にあまり言葉を発しないからです。だから私は、彼の人生哲学に同意するしかない、と言いました。彼は私のコメントに笑ってくれ、目的地に到着しました。車のドアが閉まる時、彼は大学の同僚や学生たちとの幸運を祈ってくれました。まるで私も彼のような「心理学者」になれると思っているかのようでした。

おかしな話に聞こえるかもしれませんが、私はこの出会いから本当に何かを学んだのです。深層心理学の一形態である精神分析が、この現代社会とそれが私たちに投げかける問題の中で私たちが生きていくうえで、どう役立つかということ、さらに確信させてくれたのです。というわけで、まずはこの無名の地元のタクシー運転手の方に感謝の意を表したいと思います。彼のおかげで、この講演の大げさな

タイトルも、私の講演自体のタスクも、少し楽になった気がしています！

というのが、簡単な小話だったわけですが、まず私の講演のメインタイトルである、「文化と無意識」についてお話をして、今日の午後が終わる頃には、私たちが今生きている世界において、精神分析が私たちを助けることができるのか、ということについて、確信をもって皆さんを送り出したいと思っています。お分かりのようにここで問われているのは、「精神分析は私たちを助けることができるか」ではなく、「精神分析はどのように私たちを助けることができるか」なのです。話を始める前にどうかご容赦いただきたいことがあります。申し上げたいことが山ほどあるので、皆さんに聞き疲れた、と感じさせることがないことを願っています。

最初に、精神分析について予備的なお話をさせてください。最近では、“精神分析は時代遅れの人間心理学である”とか、“エリート主義的で、知的で哲学的な追求である”というのが流行しているようです。精神分析は裕福な人、心配性な人、傷ついた人の高価な治療法だと言う人もいます。もしそれが本当ならば、私たち精神分析医はもっとのんびりとトラブルのない生活を楽しみ、お金持ちになれると思うのですが。

真実はこの虚構とは大きく異なります。精神分析は、一方では、豊かな刺激を与える心理療法の実践です。理論や研究の一形態として、それはまた啓発的で有益なものでもあります。精神分析家は、人間や人間の心について学ぶことが、興味深くやりがいのあることだと感じています。その一方で精神分析は、困難で厳しい学問でもあります。時には骨が折れ、時間がかかることもあります。しかし精神分析の仕事は、緩やかでもありながら、遠くまで届くものでもあります。だから、消費財から現代医学に至るまで、あらゆるものの即効性、そして刻々と変化する選択肢に終始している現代の生活において、精神分析がほとんど時代遅れ、とまでは言わなくとも、古臭いと思われているのは驚くことではないでしょう。ここで私は訴えたいのですが、どうか、耳にしたことをすべて鵜呑みにしたり、精神分析が125年以上前に始まった状態のままにある、と思い込んだり騙されたりしないでほしいのです。実際、あらゆる人間科学や自然科学がそうであるように、新しい洞察や理解、研究や証拠、理論や臨床的発見によって、精神分析も進化し、変化してきました。この点については後ほど、講義の最後の方に、これらの発展についてのいくつかの重要な文献を紹介しながら触れることにしましょう。以上が、精神分析についてのポジティブなニュースです。そして精神分析についての朗報と言えるのは、人間は根本的には変わっていないということです。これまでと同じように、人間は多くの困難に見舞われていて、あらゆる助けを必要としているのです。

とりあえず、歓迎されないようなニュースから始めたいと思います。そしてそれはいつも同じ悪い知らせなのですが、それは、人間として私たちは本質的に葛藤に引き寄せられ、しばしば苦しみの中に終わってしまうということです。主に私たちは、自分自身の中で葛藤しやすいものです。欲望と禁止事項が激しくぶつかり合います。私たちの心の奥底にある感情は、それに対する強引な非承認や制裁にさらされることとなります。またある時は、私たちの本当の気持ち、自分自身の内側から残酷な反対や破壊に直面してしまうこともあります。その結果、私たちは様々な結果と戦うことになるのです。不幸から病気に至るまで、その範囲は多岐にわたります。精神分析の創始者である Sigmund Freud は、この新しい科学が人間のために何を達成することができるのかを考えていました。彼は精神的な援助が、

神経症的な不幸や苦しみを、普通でありふれた不幸に変える、ということを意味していました（Freud, 1893）。これは人間の限界値や限界を常に意識していたフロイト教授の、控えめな主張でもありました。

実際、人間の精神状態はこれらの可能性よりもはるかに悪いことが多いです。現在では、怒り、無気力、退屈、無関心、気力の低下などを感じても、それが精神障害の症状だとは考えられていません。それどころか、これらの感情は、私たちがこの世界で現代的な生活を送るために支払わなければならない代償である、とさえ受け止められています。もちろんその結果、さらに有害で不安な心の状態を経験することが一般的になってしまいました。そのため、開業精神科医や宗教の司祭でさえ、これらを私たちが生きる現代の人間の状態の一部として扱っています。しかし精神分析では、これらのことを異なる態度で考えています。

精神分析の観点からは、以下のような感情があります。そして今から読み上げるのは、非常に長く不快なリストであって、順不同です。だからどうか我慢して聞いていただきたいんですけども…：急性の不安、破壊的な怒り、苦痛に満ちた苦悩、当惑させるような混乱、絶望的な軽蔑、深い抑うつ、やり場のないストレス、激しい恐怖、深い悲しみ、懲罰的な罪悪感、激しい抑制、燃えるような嫉妬、殺人的な怒り、耐えがたい孤独、衰弱させるような恐怖症、屈辱的な恥辱、自己嫌悪、自己迫害、内面的な動揺、感情の混乱…これらは、人間の創造性、自由、自発性などを破壊する感情として扱われます。これらは、人間の創造性だけでなく、自由や自発性、あるいは仕事に対する能力なども破壊してしまうのです。同時に精神分析は、これらの困難な感情を認識し、受け入れることを真摯に求め、共感をもつとそれらとその起源を理解しようと努めます。

これまで述べてきたことは、すべて個人という一つの存在に関わることでありましたが、私たちはそれ自体が一つ一つの島であるというわけではありません。さらに私たち人間の厄介なところは、自分自身だけでなく、人間関係においても、大きな困難や問題を経験するということです。しばしば私たちは互いに対立し、生活の様々な領域で混乱や紛争に直面します。またいくつか例を挙げてみましょう：このリストには、対人関係、家族関係、集団、共同体、社会や組織、国家、国際的なものも含まれますが、これらに限定されるものではありません。私たちはまた、環境や自然との戦いの中にいます。その結果、今日私たちが暮らすこの世界は、文化的偏見、内輪の憎しみ、社会的暴力、政治的過激主義、差し迫った環境破壊に引き裂かれ、混沌と無秩序の中にあります。私たちは、平和と調和が私たちに何をもたらすかを忘れてしまったのではないのでしょうか。それらはユートピアの理想のように思います。妥協や紛争解決は、私たちにとって掴みどころのないようなものと同じように見えます。

みなさんの中には、私が終末論者の一人で、終末は近い、人間のこの世界で生き残るチャンスは地獄の中にもない、と宣言しているのだと考えている人もいることでしょう。私が精神分析によって、人間とその人生について描いた暗い絵に救いの手を差し伸べることができると提案していることを、皮肉に感じるかもしれません。

さて、少し申し訳ないのですが、希望に満ちた話に変える前に、さらに悪いニュースを少し付け加えておきましょう。ありがたいことに、これが今日のこの大きな問題に対する私の最後の指摘になります。皮肉なことに、これは科学技術の進歩と発展に関するものでもあります。人間の心の合理的で論理的な活動の上昇に基づく、私たちの計り知れない科学技術の進歩は、人類にとって破壊的な代償を伴う、人

間性を失うものでもありました。それはともかくとしても、私はここで最後に、こうした現代の偉業が、感情的な存在である私たちに重荷を課して、多くの人に疎外感や孤立感をもたらしているということを述べておきたいのです。多くの点で科学とテクノロジーは、新たな発見、便利さ、支援、革新をもたらすだけでなく、私たちがナルシスト的に自己中心的になり、互いから切り離される新たな方法をも生み出しました。

私たち自身と私たちが今日生きているこの世界について、明らかに不健康とまでは言わないまでも、病んでいるすべてのものについての私の評価はここで終わりです。さて、みなさんは私が、人間とその生活におけるこのすべての悪いものを治療するための、信頼できる仮説と実証可能なパラダイムを提示するために動く必要があると思われるでしょう。なんという挑戦でしょうか。ここでベストを尽くしてみることしましょう。

では、人間の心理的・文化的問題の多次元的なレベルに対して、精神分析的な考えや洞察をどのように適用すれば、精神的・社会的な衰退の傾向を逆転させる、効果的な救済策をもたらすことができるのでしょうか。これが本日の私の講演のテーマです。

ここで、精神分析とは何か、ということについて、説明とまでいかないまでも、基本的な定義からお話をしなければなりません。ここでは簡潔なレベルでお話をするをお許ししたいと思います。この場には、これらすべてを高度に理解している専門家の方も大勢いらっしゃるでしょう。しかし私はこの簡単なレベルのお話をしたいのです。

先ほど申し上げたとおり、精神分析には多くの神話や誤解というものがあります。この誤解を解いていくためには、簡単な定義を定めることが必要だと思います。私は精神分析とは、人間の無意識の心に関する科学であり、その実践の芸術であるということを申し上げたいと思います。好奇心旺盛な方、知的好奇心のある方、特に理論好きな方からは、私から、より充実した説明を求められるかもしれません。精神分析とは、健康な状態と病気の状態の両方における、無意識の心の働きについての知識体系であり、実践でもあると言えるでしょう。したがって精神分析とは、人間を理解する方法であると同時に、心理的機能不全に対する治療法の一形態でもあるのです。

先に述べた不快な感情や心の状態の長いリストを覚えている人はいるでしょうか。これらの感情を意識的に経験する方法には、非常に明確な限界があることを指摘しておきましょう。それにもちゃんとした理由があるのです。神経科学的な見地からこれらの問題を考察した、最近の興味深い論文で、Samaniego は、人間の脳活動のうち、意識的なものはわずか 5%にすぎないと述べています。この論文の中で彼が指摘するのは、残りの 95%は意識されていないところで行われており、私たちはそれをコントロールできないだけでなく、行われていることさえ気づいていない、ということです (Samaniego, 2023)。彼は最近の研究を引用し、人間として、この異常な神経活動の問題に全く気付いていないということを示唆しています。これは、私たちの意識と潜在意識、そして行動との相互作用が非常に複雑であるためであり、また私たちの人生の導く力に対するコントロールが全くできないためです。少し詩人っぽくお話してみると、私たちは自分たちの運命をマスターすることはできない、ということなのです。

ここでの「潜在意識」という表現は、他の学問分野でも使われますが、実際には、精神分析で無意識と言われるものを指しています。言い換えれば、ショッキングに聞こえるかもしれませんが、私たちは

様々な情動の状態を知らず知らずのうちに感じ、経験しており、心の奥底で起きているこれらの出来事に対して、ほとんど、あるいはまったく口を出すことができないのです。

そこですぐに私たちは2つの問題にぶつかります。1つは、私たちが経験する様々な感情、特に不快で苦痛な感情です。もう1つは、こうした感情が存在し、私たちを悩ませ、私たちに影響を及ぼし、私たちの主観的な経験や、自分自身や他者に対する行動に影響を与えていることを、私たちは知らないということです。では、精神分析はこのような問題を抱える個人をどのように助けることができるのでしょうか。

私は、精神分析が得意とする3つの分野に注目したいと思います。一つは、言葉や会話を通して、その人の考えや感情、想像、経験、トラウマとなった記憶、空想などを表現することができるようになることです。2つ目は、このプロセスを通して、困難で辛い感情を特定し、認識し、認め、受け入れることができるようになることです。時間をかけて、自分の心がどのように動いているかを理解し、感謝することができるようになります。3つ目は、精神分析によって、心の様々な部分に流動性が生まれ、精神的な均衡が保たれるようになることです。このように精神分析は、個人の自己省察能力と精神的資源を可能にし、創造性と創造的な生活のためにこれらを利用できるようにします。このような変化を通じて、精神分析は、情緒的成長と健全な発達を促進することができます(McWilliams, 2004)。

ソクラテスの有名な言葉を聞いたことがある方もいるでしょう：「吟味されない人生は生きる価値がない」(Plato, 399 BC)。つまり、精神分析体験の最も価値ある側面の一つは、過去も現在も、自分の人生を吟味し、自己や他者との関係、人生の外的現実に対して、有益な発見をする能力を、個人が身に付けやすくすることだと言えます。ここで興味深いのは、こうした潜在的な変容は、魔法のような手順で起こるのではないということです。精神分析は、孤立した知的活動ではありません。ここで取りあげた3つの領域における潜在的な変化は、精神分析家と、この分析体験を受ける分析者もしくは患者との間の、情動的な関係の中でのみ可能なのです。分析者・患者は、話し、時には沈黙します。精神分析家は耳を傾け、待ち、時には反応し、自分の理解と考えを共有します。それは複雑で、時にはややこしいものもありますが、徐々に進化し、啓発されていく、二人の個人間の関係なのです。

ここまで精神分析とは何か、そして治療的プロセスとして、精神分析が個人の情動的・心理的生活に変化をもたらし、創造的に生きていくためにはどのように役立つかを概説してきました。この講演では、時間の制約がありますので、精神分析とその様々な形態の心理療法的治療に関わる、深い力学や仕組みに立ち入っていくことはできません。しかしこの講演の最後に、この仕事のエッセンスをうまくとらえられるような、短編映画、短いフィルムをお見せしたいと思います。

私はこれから、乳児から始まり、家族、集団、地域社会、そしてそれ以上の人間の領域をスケッチしていきます。精神分析はこれらの領域で、どのように役立つのでしょうか。さて、興味深いことに、精神分析は実は多くの点で役に立っています。その方法を簡単にご説明しましょう。

まず母と子から始めなければなりませんが、そのために、たった二人の精神分析臨床家・研究者の仕事が、広範囲かつ永続的な影響を与えていることを紹介しましょう。これは、これらの分野で活躍し、多大な貢献をした主要な精神分析家が他にいないから、ということではありません。幼児期の生活と人間関係の重要性、そして人間生活のこうした側面に対する、これらの精神分析家たちのユニークな貢献

を強調したいという私の好みから、このような選択をしたのです。

Donald Winnicott (1896-1971) は、小児科医であり、精神分析医でもありましたが、大人と集中的なワークを行い、何千もの母親とその幼い乳幼児との面談を重ねました。その中で、乳幼児期の性質と機能、そして母親自身によって、また母親自身を通してもたらされる環境的準備について、多くの深い洞察を得ることができました。母親・他者・対象との関係における、赤ちゃん・自分・主体へのこの焦点は、母子ケアにおける大きな革新でありました。Winnicott は、“母親と赤ちゃん” という単位での初期のユニークな相互作用が、その後の成人の発達や、精神的な健康や病気の可能性にとって基本的な重要性を持つ、という十分な証拠を提供することができました。Winnicott は、このような初期の経験によって、人は自分の内面と、より傷つきやすい「真の自己」を守るための「偽りの自己」を発達させ、この分裂した現実、成長の最も早い段階から、子どもも母親も何も知らずに始まっていることを発見しました。また、Winnicott の理解では、明確に定義され発達した自己を持たずに生まれた人々は、その初期とその後の人生を通して、本物の自己の感覚を探し求め続けることになります。このように Winnicott は、「乳幼児と両親の関係」、母親の「第一次的な母性的先入観」の重要性、赤ちゃんの「原始的情緒発達」の理論に到達することができました。彼は、母親と赤ん坊のユニットと、独立した人間としての子どもとの間の過渡期の空間と時間が、初期の精神的発達のプロセスにおいていかに重要であるか、ということを示しました。Winnicott はまた、現実を感じる感覚、他者や自分自身の身体やそのプロセスに触れることの必要性を強調しました。創造的な人生を送るためには、このことが必要不可欠だということを強調したのです。彼が最も強調した独創的な言葉はこちらです。「母親との関係、父親との関係、他の子どもとの関係、そして社会との関係など、すべての人間関係の唯一の真の基礎というのは、母親と赤ん坊の関係が最初にうまくいくことである」。このように Winnicott は、子どもの発達と心の健康を促進する先駆者となりました。彼の探求と発見、そして Winnicott が二人の人間関係を重視したことは、普遍的に母子ケアを永遠に変えた最も創造的な革新であり、教育、医療、社会的ケアの分野における政策や実践に影響を与え続けています。

ここで私が念頭に置いている、2 人目の精神分析家について簡単に触れておきたいと思います。John Bowlby (1907-1990) です。彼の名前は、「愛着理論」という概念に関連してご存知の方も多いでしょう。彼の研究は、もしかすると Winnicott の研究を超えていたと言えるかもしれません。Bowlby は、人間の基本的な欲求、主に養育者との関係において、快適さ、安心感、そして栄養を求めるという欲求を研究しました。これらは身体的および心理的な意味のものでもあり、愛着の形成のためのものでもありました。彼は愛着を、“人間同士の永続的な心理的結びつき” として明確にしました。愛着の様々な段階を注意深く研究する中で、彼は、これらの愛着がその後の発達にとっていかに重要であり、仕事、結婚、そしてそれ以降といった成人期のあらゆる段階において、将来の人間関係の青写真としていかに機能することを発見しました。愛着は、他者や世界全体との関係の枠組みとして機能するからです。Bowlby は、安定した生活を送るためには、安全な複数の愛着が必要であることを指摘しました。Bowlby の研究で最も重要なのは、子どもが喪失や分離に直面した時に、愛着が破壊的な影響を受けることを発見したことです。彼は、その子どもの生活のあらゆる面で、深刻な問題が長期的に発生していることを知りました。通常の認知機能、攻撃に対処する情動的能力、個人及び社会的な人間関係において問題が見ら

れました。Bowlby は、これらの側面すべてにおいて、その子どもが苦しんでいるように見えると結論づけました。世界保健機関（WHO）のコンサルタントに任命された Bowlby は、子どもの精神衛生に関する公共政策において、非常に影響力のある人物となりました。愛着と子どもの成長に関する彼の研究は、児童心理学、子育て、教育、保育に多大な影響を与えました。彼の研究をもとにしたさらなる研究が、治療法や精神疾患の予防戦略の開発に役立ちました。これが、私がタヴィストックで訓練を受けていた時に、毎週水曜日に会っていた年上の男の人（=Bowlby）のお話でした。

では、夫婦と家族の話に移りましょう。結局のところ、人生とは、母親、赤ん坊、子どもだけのものではありません。より大きな外側の集団には、常に注意と救済を必要としてきた問題があります。繰り返しになりますが、精神分析がこれらの分野でどのように役立ち、また、役立ち続けているかについて簡単に述べておきたいと思います。

まずは家族の礎から…それは親夫婦です。現代の夫婦がしばしば圧倒的な困難の数々に直面しているのは当然のことでもあります。コミュニケーション不足や経済的な問題、子育ての問題、子どものしつけをめぐる葛藤、ストレスの多い仕事、精神的な問題、未解決の家族問題、口論、性格や嗜好の衝突、役割の衝突、貞操観念、さらに別居や離婚と、数えればきりがありません。85 年以上にわたり、精神分析に基づいたカップル心理療法は、こうした困難を解決し、対処し、理解する手助けをしてきました。そのシンプルな前提は、無意識は互いの関係性の中で明らかにされ、関係性の中で形成される、ということです。Freud も、二人の人が出会う時には、その後ろには 4 人の人がいる、つまりお互いの両親がそれぞれいる、ということを書いていたかと思います。そのため、それぞれのパートナーの内的・対人的な側面が、外的な場において共に現れる場として、カップル関係の親密さと緊密さに焦点を当てたワークを行います。カップルを対象とした精神分析的ワークは、変化を達成することを目的として、これら 3 つの相互作用をする変数によって生み出される経験に注意を向けるプロセスです（Clulow, 2011）。肯定的な変化のプロセスは、カップル間の関係の無意識の側面を発見し、理解することによって達成されます。

しかし現代の家族には、もっと多くの問題があります。その問題というのは、10 代の妊娠（幸運なことに日本においては、その妊娠率は世界で最も低い部類に入りますが）、貧困、社会的不平等、家事分担の問題や家族の死、薬物の使用や依存、家族の再構成、兄弟間の対立、精神疾患、世代間の問題、つらい家族の秘密、そして近親相姦や暴力などです。これもまた恐ろしいもののリストになるので、もしかしたらもっと他に良い話をしてくれ、ということを書いていらっしやるかもしれません。この後に出てきます。個人の内的世界を精神分析的に理解し、それが家族の他のメンバーの対人関係の力学、絆、関係性と衝突をしていくことで、開かれた対話と家族の葛藤の解決への足掛かりになっていきます。これは、精神分析に基づいた家族療法が、最終的な結果を得るために大きな機能を果たすからです。治療上の注意は、家族全員の対人関係、性格特性、心理的防衛に対して向けられます。そのため精神分析的な治療では、現在の世代間の困難だけでなく、前の世代から受け継がれてきた古い対立関係にも注意を向けます。

科学、テクノロジー、自然がもたらす困難に対して、精神分析的洞察がどのように役立つかというお話をする前に、より大きなグループに話を移したいと思います。先ほど私の話のタイトルが大げさだと

申し上げましたが、もう不快なパートはほとんど終わりましたので、もう少しだけご辛抱お願いします。

皆さんの多くは、集団心理療法という言葉をご存知でしょうか。テレビや映画では、この種のセラピーに関するジョークすらあります。とはいえこのようなセラピーワークのいくつかの側面に触れることは、この文脈において非常に重要だと思います。実際、最も創造的で革新的な精神分析の応用の一つは、集団療法や心理療法においても見られますが、それについて簡単に述べておこうと思います。

集団分析、あるいは集団心理療法は、小集団における心理療法の一形態として開拓されたアプローチです。それはまた、集団と、その社会的側面における個人の行動、およびその構成員である集団との関係を研究する方法でもあります。精神分析的な洞察と、個人の社会的、対人的な機能に対する理解が組み合わされています。グループメンバー個人と、グループ内の他のメンバーとの関係に焦点を当てた治療ワークにより、両者の関係が強化されるのです。これは集団の中で分析を行って来た私の個人的な経験からお話できることですが、その結果、最終的には個人の統合が進み、地域社会・家族・社会的ネットワークとの統合も進みます。この精神分析的な手法は、1930年代～1940年代にかけてイギリスやアメリカで確立されました。しかし40年も前のことですが、山口氏は、国際的な学術誌に寄稿して、日本のグループ精神療法は、権威、守秘義務、ジェンダー、沈黙の価値といった重要な問題を、文化特有の方法で扱うことができるため、効果的な方法であるということを示唆しました（Yamaguchi, 1986）。

では、次に進んでみます。さて、グループについてですが、現代社会において最も多い緊急のニーズの一つは、効果的な組織を理解し構築することです。こうした大規模なグループの主な目的は、任務を遂行し、目標を達成することです。また、人々が人間としての潜在能力を最大限に発揮できるよう奨励し、促進する義務と権限を持っています。人間活動の中心となる主要な精神プロセスを説明する精神分析理論と実践が、グループや組織の行動について考える新たな洞察をもたらした、と私が言うと、驚かれるかもしれません。また、組織や機関における、より無意識的な構造、力学、プロセスについての理解も深めました。これには境界や役割の探求、その設定と維持、権限とリーダーシップ、その主要な任務の定義、そして組織や機関の構造における不安の管理と防御の方法などが含まれています。このような作業により、人種、階級、性別などの社会的差異がどのように管理され交渉されているか、また、組織がどのように変化し、仕事のやり方に対する革新的なアイデアを取り入れてきたかが明らかになりました。

大規模なグループや組織における精神分析的な作業では、友情、忠誠、結託、敵意、暴力、権力、メンバーの社会的アイデンティティについても調査し、解明しました。現代の組織的コンサルティングで行われている作業の多くは、これらの起源から派生したものです。経済及び企業破綻の最も巨大なものの一つである、「エンロン事件」の詳細に関する研究において（もしかすると今日の聴衆の中には、若すぎてこの事件を知らないという方もおられるかもしれませんが）、精神分析的な調査は、現代の経済グループ文化に重要な光を投げかけました。これらは、エンロンの経営陣の家族の歴史における父権の権威の失敗例と、ガス業界に関連する問題のある政府および規制体制の経験を結び付けて探求しています。精神分析の概念と組織力学への応用をもとに、一連の論文では、エンロン経営陣の考え方を検証しています。この考え方は、外部の権威を弱く、権威に値しないものとして見なしており、それがエンロンの劇的な崩壊の一因となったのです（Bunning and Perini, 2019）。今、この例をお話したのは、どのよ

うにして精神分析的なワークが、機関や組織の中で行われているか、ということをお話したかったためです。

次に、大規模なグループの別の領域、地域社会と国家について皆さんの注意を喚起したいと思います。周知の事実ではありますが、民族や人種グループ間、国家間では、憎悪は言うまでもなく、多くの紛争や攻撃性が見られます。ここでは、二人の個人精神分析家が取り組んできた、驚くべき歴史的・継続的な活動を簡単に紹介したいと思います。その二人とは、Vamik Volkan と John Alderdice です。

Volkan の研究は、国と文化、個人と社会の喪に服すこと、世代を超えたトラウマの伝達、原始的な精神状態への治療的アプローチなどにおける、精神分析的思考の応用に焦点を当てています。Volkan は、世界の政治指導者たちと非公式の対話を行うために、様々な敵対する代表者の人たちを集め、大規模な集団心理に関する新たな理論を展開し、平和的な共存のための新たな戦略を提供してきました。一方、Alderdice は、暴力的な政治的紛争の本質とその解決策をより広く理解し、取り組んできました。例えば、北アイルランドやギリシャで起こっている問題についてです。彼の研究は、準軍事組織の解散に向けた戦略を革新し、国家および地域の安全保障問題にも取り組んできました。

これらの精神分析家たちを取り上げ、彼らの研究についても簡単に論じたことで、解決不能に見える人間の紛争に直面しても、精神分析の研究が鼓舞しうるエネルギーと熱意を強調することができたのではないかなと願っています。

皆さんこれを聴くとちょっとほっとするかもしれませんが、私の講演も最後の部分に差し掛かってまいりました。テクノロジー、自然、環境について、いくつか簡単なコメントを述べておきたいと思います。Possati は、非常に興味深い最近の研究論文で、精神分析は、テクノロジーと関連した人間の行動の研究にも役立つと指摘しています。彼の中心的な仮説は、精神分析の概念と手法を、AI と人間/AI の相互作用の研究に適用できるというものです。彼の論文は、機械行動アプローチ、精神分析、そして科学人類学という3つの研究分野を結び付けています。機械行動と人間研究を探究していく中で、彼は、AI システムの行動というのは、論理数学的、または工学的な観点のみで研究できるものではないということを描いています。彼はAI システムを、単に工学的な人工物としてではなく、特定の行動パターンと生態系をもつ社会的な行為者の一種として研究する必要がある、と強調しています。したがって、AI の行動は、精神分析を含む、人文・社会科学なしには完全に理解することはできないのです (Possati, 2020)。

さて、私は自然や環境について、そして精神分析的な探求、視点、理解が、現代の生活のこれらの分野でどのように役立っているかについてお話しします。フランスの哲学者、Merleau-Ponty は、「自然」とは単に知識や実証科学の対象ではなく、私たち人間がそこから生まれた「存在」の原初的次元であるということを示しました。Merleau-Ponty は、晩年の著作の中で、Freud の精神分析的洞察にインスピレーションを得ています。私たちが今直面している問題というのは、環境や自然条件が大幅に変化したことで、私たちの主観的な精神状態がどのように変化したか、またその逆も起こりうるのかということです。

環境危機の深刻さは十分に明らかですが、このような明白な証拠を前にしても、感情的な面で、認知的な面以上に、現在の現実とその将来への影響を理解することはとても困難です。最近、イタリアの分析家、Cosimo Schinaia は、語られる個人のトラウマ的な物語と、カウンセリングルームで体験される

それらの物語との相互的決定関係について、調査をしました。「精神分析とエコロジー：無意識と環境」と題された一連の研究の中で、彼はこれらの物語を、患者が示す環境に対する肯定的な態度と否定的な態度に関連付けています。臨床例と集合的想像力からの報告を兼ね合わせることで、環境との関係における人間の混乱した情動的投資と不安に光を当てています。彼は人間と自然環境との関係の分野における多くの病理的な防御を調査しています。これらの問題には、否定、抑制、知性化、転移、否認、そして傷ついた世界における希望と誠実さの重要性などが含まれます (Schinaia, 2022)。みなさん、とても幸せなことだと思うんですけども、日本は、他の多くの国と比べて、とても環境を大事にしている国だなと思っています。

同様に、英国の精神分析の同僚である Sally Weintrobe は、次のように述べています。「私は、患者のソファで目撃していたことと全く同じことが、社会ではるかに大きなマクロのレベルで起こっているということに気づき始めました。否認の問題、例外主義の問題、何かを諦める必要があるなら現実を放棄するという問題などです。それが、私が分析家としてこのテーマに非常に興味を持った理由です。なぜなら私はこう考えたからです。世界で起こっている問題に対して、私たちは何かを語るべきだと思ったのです」 (Weintrobe, 2013)。…一つだけ小話を挟みたいと思うんですけども、バスに乗っている時、若い人がちょっとゴミを落としたのが見えたんですね。それで私が「落としましたよ」ということを言ったら、その男の子はこちらを見て「なんで拾わないといけないの？誰かが拾いたかったら拾うでしょ」ということを仰っていました。…またペーパーの方に戻りますけれども、このテーマに対する彼女の最初の著作、「気候変動への取り組み：精神分析学のおよび学際的視点」においては、現在広まっている、気候変動否定論の根底にあるものを調査しました。彼女は以下のような多くの問題を探求しました。気候変動に対する私たちの感情をどう管理するのでしょうか。なぜ私たちは自然に対する真の依存関係を認めることに大きな困難を感じるのでしょうか。アイデンティティの感覚にはどのような葛藤があるのでしょうか。歪んだ側面を持つ文化の中で暮らすことの影響とはどのようなものなのでしょうか。私たちは、自分たちが置かれている新しい状況に前向きに取り組む前に、喪に服することの必要性を、どのように受け入れるのでしょうか。

Weintrobe の次の作品は、「気候危機の心理的根幹：新自由主義の例外主義と無関心の文化」です。この大規模な研究の中で彼女は、気候危機の心理的根源が、思いやりを持つ想像力と持たない想像力との根本的な戦いを物語っているという自身の考えを展開しています。Weintrobe は、思いやりを育むことへのシフトを達成するには、気候危機に大きく関わる硬直した心理的思考である例外主義に同調することをやめる必要があると述べています。この考え方を持つ人々は、自分たちが大部分を手に入れる権利があると考えており、現実がこれらの権利を制限する場合には、魔法のような全能的な思考で、現実を再編成できると考えています (Weintrobe, 2021)。

ちょっとだけ例を出しますが、ある国においては、出たゴミを別の国に輸出して、その別の国で処理してもらうというシステムをとっています。おかしいことですね。

さて、この講演を、まとめと結論のようなものをもって締めくくりたいと思います。私は誰もが精神分析治療を受けるべきだとか、基本的な心理療法さえ受けるべきだとは一瞬たりとも考えてはいません。しかし実際には、誰もがそれらを多少は受けるべきでしょう。もちろん精神分析は文化に特異的でなけ

ればならず、個人や集団の社会的現実を考慮する必要があります。これは容易なことではありません。日本の精神分析の父である土居健郎氏に関する最近の論文で、北山氏は、土居氏が「いかなる文化の輸入も、必然的に日本人の心や精神を理解すべきである」という考えを強調していたと指摘しています (Kitayama, 2024)。これはあらゆる文化や社会における精神分析にも確実に当てはまります。ちなみに今ここであげた北山先生の論文ですけれども、本当に素晴らしいものでして、オンラインでも出てくるので、まだ見たことがない人はぜひ見てもらえたらと思います。

また世界には、古い知恵や知識、より高いレベルの意識を持つ人々というのも存在しています。彼らは自己成長や自己開発のために精神分析を必要とはしません。彼らは人間性において、他人とうまく関わり、他人の人生に創造的に貢献する能力を備えているのかもしれない。

ここで、この国に住む、精神分析医・精神分析家でない人物の一人に触れたいと思います。禅僧である根本一徹氏は、成人期の大半をうつ病や自殺願望に苦しむ人々への支援に費やしてきました。岐阜県の山間にある小さな禅のお寺を拠点に、定期的に仏教の修行合宿を行い、長年生きる希望を失っていた何百人もの人々が、人生のすばらしさを再発見することの手助けをしてきました。彼はしばしば自殺志願者を集めて、日本には数々の自殺スポットというものがあると思いますけれども、こうした場所を訪れます。また、時には自殺志願者の方々を対象に、お寺で死に関するワークショップも開催しています (MacFarquher, 2013)。私は、これは非常に良いグループのサイコセラピーの例なのではないかと考えています。

残念ながら、このような個人は人類の大多数を占めているわけではありません。もし私たちの両親や兄弟姉妹、家族や友人、教師、同僚、様々な組織のトップ、そして各国の指導的な政治家たちが、真に啓発されて自己実現を果たした人たちであったならば、私たちの今日の生活は大きく異なっていたでしょう。悲しいことに、このような理想郷は存在しません。それに加え、人間同士の争い、痛み、葛藤は、この美しい国を取り囲む山々や海と同じくらい前から存在しています。人々は、痛みや不幸、そしてその他の厄介な感情状態、情動の状態に長い間慣れ親しんできました。人間が感情や情動を意識する心を持ち、無意識を発達させてきた限り、それは続いています。

今日私が申し上げたことすべてにおいて私が主張したいのは、精神分析が、今日私たちが生きている世界における病や病を生み出すものすべてに対する唯一の解決策である、ということではありません。もし私が例えば道徳哲学者であったなら、多くの問題に対する解決策として、その主張を展開したことでしょう。もし私がカトリックの司祭であったならば、キリスト教の伝統と実践における信念と信仰が、人間の苦悩に対する重要な解決策となり得ることを、説得力をもって語ったことでしょう。しかし、日本精神分析協会の現会長である藤山直樹博士の謙虚かつ楽観的な言葉を引用しますと、「私はただの精神分析医にすぎない」し、「精神分析医であるだけ」なのです (Fujiyama, 2024)。

そこで私は今言ったようなこの視点から、現代の人間と世界の困難や問題について考えてみました。精神分析家が専門的な会話や議論で好んで使う、精神分析用語は一切使わないので、安心していただけたでしょうか。用語というのは例えば、転移・逆転移、投影・投影同一視、抵抗、防衛…といったことです。その代わりに私が提示したのは、自分自身や他人との関係、あるいは今日の一般的な文化を社会の中で経験する困難や問題を理解し、解決策を見出すための重要な方法の一つであることを願って

います。精神分析の知見や視点が、そのことを可能にすることを信じています。精神分析は、精神分析医の診察室に閉じこもって行われる治療行為ではありません。精神分析の仕事は、人間味があり勇気があり、誠実なものなのです。

また、無意識の精神生活の分野に関する専門知識を基盤とする、精神分析の洞察と理解は、文化特有の方法で応用・修正されれば、個人や家族、そしてコミュニティ、社会、組織、機関、国家といった、自然を含めたより大きな集団にも役立つと確信しています。また、環境や自然との戦いにおいても、私たちを助けることができるでしょう。フロイトがかつて述べたように、精神分析の根本的な課題は、「非合理性の悪魔と冷静に闘うこと」であり、この悪魔を「科学的に理解できる対象」に還元することでした(Freud, 1910)。

最後に、先ほど申し上げましたように、精神分析に関する短いアニメーション映画をお見せしてこの講演を締めくくりたいと思います。この作品の本質と精神を伝えるために、15年ほど前に、私と同僚数人が制作したものです。セリフはありませんが、映像と背景の音楽が物語っているかなと思います。お楽しみいただければ幸いです。何はともあれ、今日の午後のこの部屋の雰囲気を和ませてはくれるでしょう。

文化の日、京都大学を代表してこのようなお話をさせていただく機会をいただけたことを、光栄に思っています。文化の日ですが、今日と明日、お祝いしたいと思います。ありがとうございました。

【引用文献】

- Brunning, H. and Perini, M. (2019). (Ed.) *Psychoanalytic Perspectives on a Turbulent World*. Routledge, London.
- Clulow, C. (2011). *Couple Psychoanalysis and Couple Therapy: Context and Challenge*. *Couple and Family Psychoanalysis*, 1:1.
- Freud, S. (1910). A Particular Way. Leonardo da Vinci and a Memory of His Childhood. The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud, Volume SE XI. Hogarth Press, London.
- Fujiyama, N. (2024). A Psychoanalyst thinks about Haiku. Paper given at the Fourth Symposium on the History of Psychoanalysis & the Humanities. Kyoto University. Kyoto.
- Kitayama, O. (2024). Takeo Doi “wrestled” with Freudian psychoanalysis. *Journal of The Japan Psychoanalytic Society* 2024, VOL. 6, 15-27.
- MacFarquhar, L. (2013). Last Call. *The New Yorker Magazine*, June 17. Condé Nast, Advance Publications, New York.
- McWilliams, N. (2004). *Psychoanalytic Psychotherapy: A Practitioner’s Guide*. Guilford Press. New York.
- Plato, Aristocles. (399 BC). *The Apology of Socrates*.
- Possati, L.M. (2020). Algorithmic unconscious: Why psychoanalysis helps in understanding AI. *Palgrave Communications*. Volume 6, Article number: 70.

- Schinaia, C. (2022). *Psychoanalysis and Ecology: The Unconscious and the Environment*. Routledge, London.
- Strachey, J., Freud, A., Strachey, A., Tyson, A., Breuer, J. & Freud, S. (1955). *Studies on Hysteria*. The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud, Volume II (1893-1895): Hogarth Press, London.
- Samaniego, Juan F. (2023). Can AI push the boundaries of privacy and reach the subconscious mind? Universitat Oberta de Catalunya. News in AI and the subconscious mind.
- Weintrobe, S. (2013). (Ed.) *Engaging with Climate Change: Psychoanalytic and Interdisciplinary Perspectives*, Routledge, London.
- Weintrobe, S. (2021). *Psychological Roots of the Climate Crisis: Neoliberal Exceptionalism and the Culture of Uncare*. Bloomsbury, London.
- Yamaguchi, T. (1986). Group psychotherapy in Japan today. *International Journal of Group Psychotherapy*, 36(4), 567-578.
-

<第2部> 質疑応答

野口：それでは、質疑応答・ディスカッションを始めたいと思います。先生のお話をお聞きになって、いろいろご質問・ご感想などおありかと思います。貴重な機会ですので、ぜひご発言いただければと思います。

フロア 1：ご講演ありがとうございました。最後の方の自然と精神分析のお話をお聞きして、心理学と子どもというのが繋がっていたんですけれども、自然に対しても、精神分析的な見方があるというのを今日知って、学んでいきたいなと思いました。別のところで1つ質問があって、カップルのお話をされていた際に、男女が二人で会った時に、そこで無意識が生まれる、という風なことを言われていたと思うのですが、そこをもう少し詳しくお聞きしたいです。

Navaratnem (通訳 山本)：まず、最初にいただいたコメントにお返ししたいと思います。子どもさんと働かれているということで、私よりも子どもと近いところでワークをされているんだろうなと想像しております。子どもたちにとって、どういうことがニーズで、どういう愛着の形成が必要になっていくかということについても、とても理解をしておられるのではないかなと想像しています。カップルについての質問にお答えする前に、一つだけコメントをしたいんですけれども、先ほどいくつか引用していた Weintrobe の研究の気候変動のところが、やはり私は重要だと思っています。というのも、私が研究をし始めて気づいたことは、私自身とても無自覚であったなというところで、環境に対してもっとやる必要があるということ、10～15年前には気づけていなかったなということを今になって認識しています。お話の中で、ごみを捨てている若者がいたというお話をしましたが、私も10～15年前はそういった人だったと思うんですね。自然や環境に対してより注意を払って、よりリスペクトをしてということが必要ではあるけれども、みんながみ

んな敏感になれているわけではなくて、自然に対して、自分たちがどれだけ依存しているか気づいていけるというのはとても素晴らしいことだと思います。カップルについても簡単にお話をしておきたいと思います。カップルセラピーについては、私は実は資格をとっているわけではないのですが、グループで見ていく時にカップルがそこにいたり、カップルについてワークをしたりというケースはありますので、そこでコメントをさせていただきます。先ほど私の講演の中で出てきました、Freud の有名な表現で、2 人のカップルが部屋の中にいるときに、そこには 4 人がいるということを言っていたのですが、Freud が言いたかったことというのは、分析してみると、臨床のワークにおいて、二人が会うことがあった時に、その人が抱えている無意識も、その人と一緒に連れてくることもあるんだということだと思うんですね。つまりそのカップルが恋に落ちてうまくマッチする、ということがお互いにあったときに、そこに意識をしていないような期待であったり、何か求めるもの、欲望や欲求、ニーズであったりを、無意識的に持ってくることもある、ということです。要は、自分が家族の中で育った環境、親御さんとの関係性の中で解決されてこなかったものを無意識的に持ってきてしまうことがある、相手に対して期待してしまうことがあるということだと思います。ひとつコメントを付け加えてみると、二人の人が会った時というのは、やっぱり沢山のことが起こるんですけども、いくつか挙げると、相手に対して依存的になる、甘えたり寄りかかったりするということがあって、そして拒絶されることへの恐怖も持っていて、近づきすぎることでも遠くなりすぎることでも怖いという気持ちもあって…特にロマンチックな関係性では、そういうことが起こりうるのではないかと思います。

フロア 2：ありがとうございました。最初の方で、無意識が 95%、意識が 5%というお話があったと思いますが、最近では、人間には自由意思がなく、須らく無意識が決めているという説もあるんですが、そういった説に対して、先生はどういった見解をお持ちでしょうか。

Navaratnem (通訳 山本)：正解かもしれないですね。無意識というのは、実は Freud よりももっとも前に発見されているものでもあって、Freud が初めて見つけたもの、というわけではないこともお伝えしておきたいと思います。Freud に対してリスペクトを欠いているわけではありませんが、1856 年に生まれるまでに沢山歴史があって、その後に生まれた人ということでもあるので。なぜかという人間というのは、それよりも 1000 年以上も前から生きているもので、その時から人間は無意識を抱えてきたはずなんですね。けれども、仰っていただいた考えについては、本当に正しいのではないかなという感じがしています。私たち人間は、自己をコントロールできるのではないかと考えているわけですが、やっぱりそれは難しいことであって、どうしても無意識によって突き動かされるところは非常に大きいと思うので、今言っていたコメントはとても良いポイントを突いていただいたと思います。ありがとうございます。

フロア 3：小学校の先生をしています。先生のご講義の中で、集団心理療法が大切である、有効であるというお話がありました。日本でもいろいろ方法があるとも聞いたんですが、今、不登校や学校に行きにくいなと思っている子が多くいるんですが、その子たちがリラックスできる小学校にできるような、集団心理療法のようなものがあれば教えていただきたいです。

Navaratnem (通訳 山本)：質問していただいてありがとうございます。先ほど質問していただいた方も

含めて、子どもとのワークをされている方が来られているということを知って、とても興味深く嬉しい気持ちでおります。不登校については、日本だけの問題というわけではなくて、イギリスにおいても、学校に行かない子どもというのは、とても大きな問題になっています。今仰っていたアイデアがとても面白いなと思っていて、子どもたちを集めて、グループの中でワークをしていくというのは、とても良いアイデアだなと思ったんですね。なぜかという、子どもにとってはお互いに同一化、identification することはとても大切なことで、特に問題を共有できているという感覚を持つことがとても重要でもあるんですね。なので、ぜひそのアイデアを持っていたいて、子どもたちを集めてワークをしてみる、ということをやってみただけるととても良いなと感じました。

フロア4：子どもを中心に精神科臨床をやっています。分析的臨床家って、現代においてどことなく無力感を感じざるを得ないというか、認知療法や大脳生理学に押され気味なところがあって、若干無力感を感じているんですが、でもその無力感って実は無根拠で、勇気をもって普通の臨床に臨んでいけばそれで良い、と励まされた感じです。本当にありがたいと思います。それで、Freud から Winnicott、Bowlby からグループサイコセラピーをとということで、おそらく Wilfred Bion の考えも背景にあるのかなと思ったんですが、グループサイコセラピーは非常に重要だと思っていて、晩年の Harry Stack Sullivan は、国際紛争に精神医学の領域から奔走して、最後は過労で亡くなってしまいましたが、すごくこれは大事な活動なんだということを、改めて知らされたというか、本当にありがたいお話だったなと思います。単に感想ですが、ありがとうございました。

Navaratnem (通訳 山本)：私自身、Sullivan のワークにはとても関心があり、リスペクトも寄せています。あとはグループですとか、Sullivan の研究者グループの中にもいろんな方がおられて、とても興味深いなと思っています。コメントしていただきありがとうございました。

野口：せっかくなので松下先生にもコメントをいただけたらと思うのですが、いかがでしょうか。

松下：今日のご講演をお聞きしまして、改めて精神分析の観点や姿勢というのが、あらゆる人がより良く生きて、より良い社会を作っていくことに文化的に寄与するものだなということを改めて実感しました。私も、人間社会もネガティブな面に回避的であることでかえってネガティブなものにとらわれて振り回されるという病理を抱えている、という風に考えております。そういった意味で、今日の先生のお話に深く賛同しました。ここからが質問なのですが、今日の講演は、人間の普遍的な・文化的な生に関するものという風に受け取っています。精神分析において、ネガティブなものを扱う際の、文化的な違いというのはあるでしょうか。もしあるとしたら、どういった違いがあるのかということについて、ご示唆をいただければという風に思っております。

Navaratnem (通訳 山本)：松下先生、ご質問いただきありがとうございます。まず、普遍的で文化的な生についてということですが、文化による違いは、私もあると思っています。精神分析がここ最近で貢献してきた分野、25年くらい前には、なかなかそこには寄与できていなかったなという分野が一つあります。簡単なコメントですが、精神分析の分野においては、文化的な側面、特に人種ですとか、ということにはなかなか触れられてこなかったという風に思います。昔は、戦争に対して、戦争の傷をどうやって癒していくのか、そしてどう戦争を避けるのかということ

を多く扱って来た学問でもあるという風に思っています。特に戦争を経て、アメリカなどでその傷やトラウマがどのように残っているか、という視点では、文化的な差異、国ごとの差異についてお話をすることは精神分析ではあったと思うんですけども、先ほど述べた別の文化的な差異というところについても、ここ 20～25 年くらいは精神分析でも取り扱ってきていて、Greenberg などの研究者などがそこに触れながら研究していると思います。ネガティブなものについて、というのが質問のメインのところだと思うんですが、西洋的、キリスト教的な文化、たとえばイギリスを例にとってみると、これはインドとかと比べると大きく違うわけですね。特に、どのようにネガティブなものにアプローチして、どうやって考えて、そしてどのように表現するかというところに大きな差異が出ると思います。個人的に考えるのは、西洋の文化においては、ネガティブなものを表現することに対する禁止というものがあるように思います。例えばインドにおいては、いろんな神様がいるんですけども、“カーリー” っていう神様が、破壊の神様だったりするんですね。つまり、破壊的でネガティブなものにも神様がいるということで、私たちは“ネガティブなものを隠したい” ということがあると思うんですが、そこから表現の方法自体はかけ離れているということがあって、それは文化的な差があるという風にも言えると思います。どんな感じの違いがあるかというと、インドにおいてはお祝いすらする、という感じなんですね。ネガティブなことを表現して、さらにそれをお祝いするというのは、西洋の文化においては、それを表現すること自体も許されていないところもあるものですから、そこからは非常に距離を置いている感じがあるというか、インドではネガティブで破壊的なものも、セレブレーションする、神様まで作ってお祝いするということがあると思います。もしかしたらセレブレーションという表現はいまいちだったかもしれませんが、どちらかというところ、ネガティブなものを認めて尊重する・リスpektするということの違いなかなと思います。そこは精神分析に繋がるところもあると思っていて、つまり精神分析においては、ネガティブなものがあることを認めることを手助けする、ということがあると思います。この質問をしていただいてありがとうございました。

松下：ありがとうございました。とても示唆的でした。

フロア 5：ありがとうございました。今日は無意識ということで、文化、社会、集団、自然という範疇の中で、無意識ということを語られたと思うんですけども、無意識というのは、Jung が言う個人的無意識、普遍的無意識というのがありますが、この普遍的無意識と同質と言いますか、同じような概念であると考えてもよろしいのでしょうか。

Navaratnem (通訳 山本)：ありがとうございます。今日は Jung についてはあまり触れられませんでした。その通りですね、Jung は“collective” と言っていますけれども、そういった意味での無意識ということをお話しました。社会的・集合的な無意識に着目するのは、集団の中ではとても重要なポイントだと思っています。なぜかというところ、グループでワークをしていく中では、自己の関係性であったり、患者とグループのメンバーとセラピストの関係性であったり、そのグループのメンバーと別のメンバーの関係性であったり、またグループ全体の中の関係も見えていくことになりますが、特にこのグループ全体の関係というところは、意識的になることが少ないところでもあるので、そういう意味では、集合的な無意識を意識しておくのはとても重要だなと思っています。

ます。

フロア6：本日のお話で、精神分析がグループダイナミックスにも、非常に意味のある示唆を与えているということをお聞きできて、とても勇気づけられた思いがいたしました。一つ質問ですが、離婚や葛藤というところで、一方が「自分は正しい」「だから自分は話し合う必要がない」という風に思っていることもありますし、国際的な場面でも、「自分の方に正義がある」と思って、交渉の場にもつかない場面があると思います。これは小さなレベルとか大きなレベルで違うんですけれども、同じようなダイナミックスが働いているのではないかなと思います。Volkanの活動をご紹介いただきましたが、そういった対立する2つのパーティというか、そういうものが話し合いや交渉の場につくとか、そういう場を設定するというところに、精神分析的な観点から何かヒントをいただけるとありがたいなと思います。よろしくお願いします。

Navaratnem（通訳 山本）：とても難しい質問をいただいたような気がしています。まずは質問を理解できているか確認したいのですが、時折ミーティングに来て話し合わなければならないときに、片方が「話し合うことなんてないです」「対立していることはないです」という風に仰って、来られない方がおられる、という感じでしょうか。

フロア6：そうですね、例えば夫婦間で言うと、片方はすごく苦しい思いをしているけれども、片方は「自分は全く正しいから話し合う必要はない」とか、そういう風に会話すら拒絶していることがあったりとか、例えば国際的な紛争で言ったら、どちらかが「自分を攻撃してくるから交渉の場につく必要も感じない」とか、そういうことを考えているということを想定していました。

Navaratnem（通訳 山本）：人間って、非常にそういうところがありますよね。二つのサイドがある時に、交渉の最初の段階でも、一緒に座るということがとても難しいこともあると思います。最近だと、現代的な技術が議論されてはいて、紛争を解決する方法はたくさん研究されてきているわけですが、一つ主なものとして言えることは、ニュートラルなところで一つ信頼を作る、信用できる場所を作ること、そうすることで、来て安全だと思える場を作ることが大事なのではないかなと思います。すべて答えられたという感じはしていないので申し訳ないのですが、そのように思います。ありがとうございます。

野口：それでは、そろそろお時間が参りましたので、本日の公開講座はこれにて閉じさせていただきたいと思います。みなさま、今一度、Navaratnem先生と山本先生に大きな拍手をお願いいたします。それではこれにて閉会といたします。